法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-10

アイルランド植民と統治理性 : W.ペティと政治経済学の開始

GOTO, Hiroko / 後藤, 浩子

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
経済志林 / 経済志林
(巻 / Volume)
80
(号 / Number)
1
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
31
(発行年 / Year)
2012-09-20
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008157

「アイルランド植民と統治理性：W. ペティと政治経済学の開始」

後　藤　浩　子

これまでW・ペティは，歴史学においては，クロムウェル支配下の共和政期に「ダウン・サーヴェイ」を実施し，その功績によってケリーに土地を得たイングランド人として，また，経済学史においては「政治算術」の創始者として，位置づけられてきた。日本においては,「労働価値学説」の先駆者として経済学史研究で取り上げられ，最近では,「政治算術家」としてダヴナントとの比較を試みた伊藤誠一郎による研究，そして「軍事財政国家」理論の先駆者としてのペティを位置づけ，さらに政治算術へのベーコン的方法論の影響を分析した大倉正雄による研究がある[1)]。

これに対して，海外の近年の研究では，ペティの経済思想形成におけるアイルランドという文脈の重要性が指摘されている。ペティがたんにクロムウェル支持者のイングランド人不在地主でも政治算術の学者でもなく，「アイルランド経営と統治」の理論家であり実践家であったことが強調されている[2)]。つまり，地主としての彼の「改良と経営」を目指す視点の重要性である。この結果，ペティは,「植民事業とは何か」を経済パラダイムにおいて定義しなおし，経済を基底においた上で政治制度を考察する政治経済学的視点を確立することができた。このペティの視点こそ，M・フーコーが「統治性」概念のもとに探究してきた新しい知のあり方であり，これが，それ以降18世紀を通してアングロ・アイリッシュ層に共有されていく「統治の知」の原型となったと思われる。本論文では, ペティの「政治的解

剖」や「政治算術」といった手法を統治理性として把握しなおすことで，政治経済学形成の一要素となった知のあり方を明らかにしたい。

1．「政治的動物（ゾーンポリティコン）」と「ホモ・エコノミクス」の狭間

（1）「統治術」概念とマキャベリ

これまでのブリテン思想史研究では，ポーコックが『マキャベリアン・モーメント』で使用した「マキャベリズム」「ネオ•マキャベリズム」という用語が思想分析の重要なカテゴリーとして機能してきた。例えば，I.ホントも『貿易の嫉妬』においてそのカテゴリーを使用している[3)]。その場合,「マキャベリアン」は王政復古期のハリントン，ミルトンなどのコモンウェルス擁護の思想家を指し，「ネオ•マキャベリアン」はダヴナントなどの重商主義者を意味する。これに対してS・ピンカスは，ブリテン思想においてマキャベリは「マキャベリズム」と類分けできるほどの影響力をもっていたのか，と疑問を呈している。「ポーコックとその支持者にとって，1650年代はマキャベリがイングリッシュの顔を与えられた非常に重要な時期である。私がここで言いたいのは，このような議論はその重要な時期のイングリッシュ・コモンウェルス擁護者によるイデオロギー生産の極めて限られたサンプルに依拠しているということである。これらの論客たちの多量の著作を幅広く読めば，イングランド人はその時期にマキャベリを読んで理解した一方，彼らはマキャベリの政治経済学を拒否したし，彼の公民的徳の賞賛を和らげたことが明らかになる。もし純粋なマキャベリ的時期つまり古典的共和主義の時期があったとすれば，それは短命だったのだ。マキャベリの著作はイングランド人が彼らの政治的社会的宇宙を再考するのを助けた点で極めて重要だったかもしれないが，非常に小規模で経済的に保守的な論客グループに対して以外，彼の著作は，青写真を提供しなかったのだ」[4)]。

17世紀におけるマキャベリの影響についてはM.フーコーもまた，否定的

見解を示している。彼は，コレージュ・ド・フランス講義において，経済学の生成がどのように法•政治理論を変容させたかを「統治性」概念の下に分析したが，その際,「マキャベリには統治術はない」と明言し，マキャベリの議論の枠組みと重商主義国家の統治術を求める人々の要求との齟齬を次のように指摘している。「マキャベリが救済•救出しようとしているのは国家ではなく, 君主が支配を行使する当のものとの間に持つ関係なのです。つまり救済すべきは領国（領土や人口に対する君主の権力関係）です」[5)]。しかし，マキャベリを解釈することによって17世紀の同時代人は統治術の問いを推し進めたことは確かであるとも彼は確認している。「彼は, さまざまな価値を帯びて, この議論の中心にいました。じつは彼は, 1580から1650年ないし1660年というこの全時期を通じて，常に議論の中心にいました。彼は，物事が彼を経由するというのではなく，彼を通じて言われるというかぎりにおいて議論の中心にいた。…統治術を定義したのは彼ではないけれども，彼の言ったことを通じて統治術とは何かということが探し求められた」[6)]。フーコー本人は意図してはいないが，統治術とマキャベリ自身の思想の連関を断つ彼の議論は，マキャベリズムを統治術や経済学形成の重要な契機と観るこれまでのポーコック的ブリテン思想史観への一つの異議申し立てを意味する。

では，そもそもポーコックの「イングランド・マキャベリズム」とはどのようなものか。ポーコックの「マキャベリズム」概念もまた，マキャベリ自身の思想内容を意味しているわけではない。その要素の第一は，マキャベリ自身による徳〈ヴィルトゥ〉と軍事的ポピュリズムの結合であり，第二は，ヴェネツィアを範型とする混合政体論である。ポーコックはブリテン思想史分析の照準を共和政期に合わせており，このアプローチからすれば，そこで生じた思想潮流の組成を説明するための概念装置として「マキャベリズム」は確かに有効なのである。彼がイングランドにおいて「市民」がいかに登場しえたか次のように語る際に，我々が連想する光景はやはり共和政期のそれである。「しかし, 理性と経験だけでは個人を市民とし

て特徴づける根拠を与えることはできなかった。そのような特徴づけが起こりえたとすれば，それは政治的〈徳〉に関する古代的観念の復活があったときであり，支配し，行為し，意思決定することを本性とする〈政治的動物〉の復活があったときであった。そしてこれまでのところ，人びとが実際に集合し意思決定するように召集された共同の風土において行為する，〈活動的生活〉のイデオロギーだけが，いかにしてそのような復活が生じうるかを示すものとして出現していたのである」[7)]。このように，ポーコックは政治的動物こそが自由市民の第一の要件であるとし，自主的政治参加と領土の保全が個々人の徳として自覚されている状態の出現をイングランド共和政期に見る。

しかし，これだけでは，いまだ「マキャベリアン・モーメント」には至らない。ポーコックは，ハリントンの『オシアナ』が，従来のイングランドの政治理論と歴史の主要な修正を刻印したと見なしている。この修正は，「パラダイムの突破の一つの瞬間」といいうるほどに重要な質的転換であり，これは市民的人文主義とマキャベリ的共和主義から引き出された概念を援用して成し遂げられたのであり，ここにこそ，彼が「マキャベリアン・モーメント」と名づける根拠がある。では，この修正の具体的内容は何か。ポーコックは，ハリントンが，マキャベリの軍事的ポピュリズムの基礎に財産の保有，とくに自由土地保有を結びつけた点を高く評価する。これはマキャベリ自身が到達できなかった点であり，この自由土地保有こそ，その保有者が真に自立した市民として共和国の剣を持てる根拠なのである。「武装はかつては封建的土地保有の一機能だと見なされていたが，それは財産の保有に基礎を置いていることが判明した。重要な区別は臣従による封建的土地所有と自由土地所有の間の区別であった。それはある人の剣が彼の主人の剣か，それとも彼自身の，したがって共和国の剣かを決定した。そして，自由な土地所有権の機能は，自由な公共的行為と市民的徳のための，武器の解放，ひいては人格性（パーソナリティ）の解放となった。人間の人格（human person）の政治化は，今やイングランドの政治思想の言

語において完全な表現を獲得したのである。神のイングランド人は，今や彼の剣と彼の自由土地保有によって政治的動物となったのである。政治的人格性の基礎が不動産もしくは（あまりありそうではないが）動産という意味での所有（property）であるべきならば，それはアリストテレスのオイコス以上に具体的な物質的なものに繋がれ固定されたということになる」[8)]。

こうしてポーコックは，政治的動物の存立基盤として「所有」が位置づけられた点を第一の画期とし，これを「ハリントン主義」と名づけたが，彼の思想分析の特徴は，あくまでも政治的動物がもつ経済的次元から経済人の登場を導こうとするその戦略にある。より正確に言えば，ポーコックにおいては，政治的動物の所有の目的が公から私に変容することが「経済」の問題として捉えられ，すなわち政治経済学登場と結び付けられるのである。「具体的に言えば，次のことが示されうる。すなわち，名誉革命に続く半世紀は，政治思想が，政治学の経済的・社会的基礎や政治的パーソナリティが変化しているということを自覚的に認識することに没頭するようになった時代であり，その結果，政治的動物は，彼の本性に根本的に影響を及ぼす物質的で歴史的な変化の過程のなかで，関与する観察者という自らの近代的性格を身につけたのだということである。そして，これらの認識の変化は，政治経済学の理論における新マキャベリ的並びに新ハリントン的様式の展開を通じて，そしてイングランドが主要な商業的，軍事的，帝国的権力（power）であるブリテンとして出現するのに対応して，もたらされたのだということも，示されうる」[9)]。こうしてポーコックの議論では，オーガスタン時代に信用と商業をめぐる論争から新マキャベリ的政治経済学が登場する。この第二の画期を彼は「新ハリントン主義」とも名づけるのだが，この段階で政治的動物の亜種として経済人が導き出される。注目すべきは，ブルジョア・イデオロギーが政治的個人を駆逐して人間自身の「私化」を全面的に展開することはできなかったのだ，と述べられている点である。「わたしたちが発見したのは，第一には，一つの『ブルジョア・イ

デオロギー』, すなわち政治的動物としての資本主義的人間のための一つのパラダイムは，金利生活者と事業家を腐敗であると実質的に規定したアリストテレス的および市民的人文主義的な価値の遍在によって，その発展を多いに妨げられたということである。第二には，もし実際に，資本主義的思想が個人を私化することで終わったとすれば，そうなった理由は，個人を市民として表現する適切な仕方を見出すことができなかったからだ，ということである」[10)]。資本主義思想は従来の「市民」観念の中味の変更にまでは手をつけることができず，個人に私的側面というもうひとつの側面を付与しただけに止まった。それゆえ，ポーコックの統治（government）はあくまでも政治的であり，政治的なものを保全し，しかもそれに依拠する機構として位置づけられている。統治という建物の持続は，徳，そして同感や誠実といった情念の存在に依拠しているのである。信用と信頼を調和させ，希望や恐怖をバランスよく保って社会を安定化させ，繁栄を増大させること，これが生じるように行動するのが統治の仕事であり，そうすることで，徳が唯一栄えうる場である統治の形式的枠組みが不変のまま保存される。この統治という建物の枠組みがなければ,「政治的動物としての個人は，自らの市民的な存在を正式に主張することも，自分の行動原則を更新することも永遠にできないのである。彼の仕事は，自らの社会生活を営み，その徳を実践し，人びとが相互に持ち合う信用と信頼に対して自ら貢献することである」[11)]。これに対して，市民的存在ではない私的部分，つまり「彼の世界（his world）」は, 慣習的で主観的であるとされる。「経験（と市場の状態（the state of the market））だけが, 現実についての彼の意見がどの程度，真実に基礎を置いているかを彼に告げるであろう。わたしたちはおそらく, 現代の歴史家が商業社会の哲学に好んで探そうとしている『私化（privatization）』を定義する時点に到達したであろう」[12)]。ポーコックの議論では，資本主義的人間の住処は，統治の管轄から外れて生成してくる私的領域にあり，しかしあくまでもそれは政治的動物の外に付加されてくる属性として位置づけられている。

以上がポーコックの概略的構図だが，フーコーはこれとは大きく違う経済学の生成の流れを描いてみせる。では，その相違はどこにあるのか。フーコーはポーコックに直接言及しているわけではないので，筆者自身がフーコーの議論との比較から導き出した論点をここで検討してみたい。まず，最も重要な違いは，政治的動物からの変異としてホモ・エコノミクスが登場したのではない，という点である。したがって，政治的動物をいかに歴史的に分析しても，ホモ・エコノミクスの源にはたどり着けないことになる。第二に，ポーコックは「所有」とその私化を経済的なものとして捉えているが，実はそれは権利の問題としてあくまでも政治的レベルにある議論ではないのか，むしろ経済的なレベルとは，別の様式のものの見方を随伴するものではないか，という点である。第三に，「統治」の捉え方である。ポーコックの言うように統治はあくまでも政治的なものなのか。統治自体がホモ・エコノミクスの登場によって変質したプロセスがあるのではないか，という点である。

以上の点をより詳細に確認するために，次節ではフーコーがブリテン思潮をどのように分析しているかを概観する。

（2）フーコーによる「ブリテン経験論と経済学がもたらしたラディカリズム」の考察

フーコーによれば，18世紀末，社会思想は，政治権力の行使をどのように法的に制限するかという問題を抱えていた。そして，この問題には二つの異なるアプローチがあった。一方は，法権利から出発するルソー的道であり，他方は有用性に基づく統治実践の吟味の道すなわちブリテン的ラディカリズムの道であった。このブリテン的ラディカリズムの道を新種の認識の様態であり，前者とは系統において異なる別種の流れとして取り上げる点に，フーコーの議論の特徴がある。「この道に従うならば，統治の権限の及ぶ範囲はいまや，統治によって何を行い何を行わないことが有用であるかということから出発して規定されるようになる。統治の権限は，統治

の有用性の境界によってその限界を規定されるようになる。統治に対して以下のような問いを，絶えず，その行動のあらゆる瞬間に，古かろうと新しかろうと，そのすべての制度に関して提出すること。それは有用であろうか。それは何にとって有用であろうか。いかなる限界のもとでそれは有用なのか。それはどこから無用となり，どこから有害となるのか。根源的な法権利とは何か，私は主権者を前にしてその法権利をどのようにして価値づけることができるのか，といった革命の問いとは異なります。それは，ラディカルな問いであり，ブリテン的ラディカリズムの問いです。ブリテン的ラディカリズムの問いとは，有用性の問題なのです」[13]。既存のすべての制度を有用性という基準から査定しなおすという態度の登場によって，統治自体がその性格を変化させることになったのだというフーコーの指摘は，上述のようなポーコックの統治理解と大きく袂を分かつ。徐々に統治は有用性によってその存在意義を書き換えられ，必ずしも市民の権利と意志を基盤とするものではない統治観念が政治経済学とともに登場するようになるのである。

では，以上のようなブリテン的ラディカリズムが前提する人間とはどのようなものか。それは有徳の市民とは種を異にする存在としてのホモ・エコノミクスである。ホモ•エコノミクスの基本的属性は，「インタレストの主体」であること，ただそれだけである。ブリテン的ラディカリズムは，新しい知の形式としてインタレストの原理，つまり「個人的で，還元不可能で，譲渡不可能な選択の原理」であり「原子論的で無条件に主体自身に準拠する選択の原理」を打ち立てたのだとフーコーは見なす[14]。ホモ•エコノミクスは「インタレストの出発点もしくはインタレストのメカニズムをもつ場所としての主体」であり，そして「インタレスト」は直接的で主体的な一つの意志の形式として位置づけられるのである。

フーコーは，このインタレストの主体は，法権利の主体に還元不可能である点を強調する。この結果，社会契約も，権利の委任手続きによる根拠づけではなく，その契約の履行と持続がインタレストに適うという理由で

是認されるようになる。この契約の読みかえはヒュームに始まるとされる。契約が守られるのは，そこに契約があるからではなく，契約があるほうが有利だから，と人々が判断しているためだ，というヒュームの解釈は，ホモ•エコノミクスによる社会制度の読みかえの開始を象徴する。契約を構成し継続させるのは，インタレストの計算において最後まで主体に対しインタレストを提示し続けるある種の要素なのである。こうして，インタレストの主体は法権利の主体からはみ出し，それを包囲して，常に法権利の主体が機能する条件となってゆく。

インタレストの主体は法権利の主体と交差し補完する部分を持つにせよ，個々の主体同士の関わりあい方，つまり集団的関係の結び方という点では，両者はまったく違った展開を示す。法権利主体が，契約という自然権の委譲の原理により，一段超越した法権利の大主体を構成するのに対し，インタレストの主体は，共有され拡大された主観性には決して至らない。この点について，フーコーは，ホモ•エコノミクスの興味深い分析を行い，そこから経済学が随伴している語られざるセントラル・ドグマを抽出している。まず，彼が指摘するのは，アダム・スミスの「見えざる手」の中で蠢くホモ•エコノミクスたちは集団的•総体的利益に対し「ただ単に盲目であってよいだけでなく，必ず盲目でなければならない」ことを必須要件としている点である[15)]。つまり，ホモ・エコノミクス個々人の挙動は状況全体を決定する一因子でありながらも，先々の状況変化を予想できず状況全体を見渡すこともできない状態にあるということだ。まさに遮眼革を付けられ四足を互いに結び付けられた難儀な競走馬状態なのである。そして，これに更なる条件がつく。なるほどホモ・エコノミクスは状況の偶発的変化に対応し，その挙動は他者にも影響を与えはするが，この対応も他者への影響も彼の意思の埒外になければならないこと，そしてホモ・エコノミクスはもっぱら自分の利益最大化だけを目指して計算と利己主義的選択を行わなければならないこと，というのがそれである。フーコー自身は，これら準則がホモ・エコノミクスに課せられた「ねばならない」指令である

と指摘しているが，18世紀のブリテン・ラディカリズムにとっては，そのような準則に適うことは人間情念の本性／自然的傾向であり，法や社会制度の導きに頼らずとも実行可能なものであった。

とはいえ，このような個人的選択の主体が是認されるのは，たんに本性／自然ゆえのことではない。個人的選択主体の「自由」が支持されるのは，個々人が利己主義的に振舞えば振舞うほど結果的に最大の集団的利益が得られるという「見えざる手」の根本教義があればこそである。ホモ・エコノミクスは集団的利益を予め計算することが不可能なのだから，全体的展望や他人への配慮などは，余計どころか負の結果を招きかねない。言い換えれば，ホモ・エコノミクス個々人の利己主義的選択が肯定されるその理由は，実のところ，彼の計算の外で結果的に生じるはずものに負っているのである。こうして，ホモ・エコノミクスは他者を配慮せずとも，自然発生的で結果的な総体的インタレスト増大により他者のインタレストとも調和する。

だが，見えざる手が本当に不可視であれば，結果的なインタレスト最大化を誰も請合えるわけがない。かの教義が成り立つためには，見えざる手を見ることができる地点の存在が前提されなければならない。こうして「経済プロセスに住まう摂理の神」の場が「要請」として前提されるとフーコーは述べる。「もしプロセスの全体性が経済的人間の一人ひとりから逃れ去るとしても，ある種の視線に対して総体が完全に透明であるような地点がやはりあるという考えであり，そうした視線をもつ誰かの見えざる手が，その視線の論理とそれが見るものとに従って，分散した利害関心のすべての糸を結び合わせるのだ，というわけです」[16]。このような総体が完全に透明になる地点に立とうとする人々，それこそが経済学者であった。彼らは，経済活動が孕む自然の摂理を説くことによって，古い統治理性に準拠した政治的意思を貫徹しようとする政治家に対峙した。18，19世紀は経済学が統治理性批判としての機能を果たした時期であった。そして20世紀，第二次世界大戦後，旧西ドイツという国家においては，そのような経済学的知

が国是にまで上昇した。経済学的知は，統治理性におのれの限界を自覚させ，経済活動の自由を第一に遵守すべき事項として国家に認めさせたのである。

経済学的知が統治に要請したのは，結果的に生じる総体的インタレストの最大化のために，個々人が自分のインタレストを理解し，障害なくそれにしたがうことができるような制度を作ることであった。「経済学は，統治すべき国家の全体性に対する主権的視点，主権者の視点が，ただ単に不要であるばかりではなく不可能でもあるということを表明しはじめる学問分野なのです。経済学は，一つの国家の内部で自らの主権を行使する主権者の法的形態から，一つの社会の生にとって本質的なものとして現れつつあるもの，すなわち経済プロセスを掠め取ります。その近代的整合性における自由主義が始まったのは，一方ではインタレストの主体，経済主体を特徴づける全体化不可能な多数多様性と，他方では法的主権者の全体化する統一性との間の，本質的な両立不可能性が定式化されたときなのです」[17]。

フーコーは，近代的統治理性を，統治術に対し法権利という外在的原理で制限する手法ではなく，内在的原理による統治術の調整や制限の登場として特徴付けている[18]。人口と物資を適切な調整のもとに増大させるという国家理性が定めた統治術の目標を達成するための統治実践の知として16，17世紀に統治理性は登場した。この統治を調整・制限する内在的原理には以下のような特徴がある。第一に，統治実践を「不法／不当」ではなく「巧さ，適宜，必要」という事実に基づき調整するものであること，第二に，統治実践を「あらゆる状況を通じて常に有効な原理」とそこから導出される「道筋」に従って調整するものであること，第三に，統治実践を「統治の目標」への到達手段と見なし，「統治理性」の計算に基づいて制限するものであること，第四に，統治される主体の中に「統治に従う部分」と「統治から自由な部分」という分割を設定するのではなく，統治実践の中に「なすべきこと」と「なすべからざること」の区分を設定し制限するものであること，第五に，統治者と被統治者の間の取引や交渉で調整や制

限が決まるのではなく，「予期せぬ出来事」の到来とそれへの対処において，なすべき統治実践とそうでないものが区分されること，である。

しかし，このような統治の効果を上げるための内在的原理による調整さえも不要とする時代が到来した。すなわち18世紀半ばのスミスの登場に象徴される批判的統治理性の時代の始まりである。統治をもっともよく行うために「いかにして統治しすぎないようにするか」を問い続けた統治理性の流れは，それによって大きく変質した。全体を見渡す統治理性は不要かつ不可能とされ，それに代わるものとしてホモ・エコノミクスが登場したのである。

この統治理性と統治理性批判についてフーコーが述べていることは示唆に富む。統治理性に対応して，「政治経済学」という知的道具が登場した。それは，富の生産と流通を分析し，一国を繁栄させる統治方法を探究し，一つの社会における諸権力の組織化，配分，制限について考察するものであった。フーコーは，このような政治経済学（l'économie politique）はひとつの学，まさに統治の学であり，知の一つの形態であるが，経済学（la science économique）はそうではない，と指摘している[19)]。経済学は統治の学ではなく，自由主義の統治術との関連において存在している学なのである。これに対し，政治経済学はその生成の重要な要素として，政治体の奥底に自然体と同様の存立構造を見出そうとする試みを伴い，その結果，政治体そのものに対する認識の変化が生じた。この変化があるからこそ，政治経済学は「新しい知の形態」となり得たのである。

（3）ステュアート朝「帝国的統治理論」とラディカリズム

フーコーの「コレージュ・ド・フランス講義」は，ブリテンにおけるラディカリズムの誕生を，共和政期よりはむしろステュアート朝開始の時期に見る点でもまた，ポーコックと大きく異なっている。なぜステュアート朝開始期が重要であるかといえば，開始にあたって，イングランドが過去に被ったノルマンによる征服の問題に向き合いつつ,「帝国的統治理論」が

探究されたからである。ステュアート朝ジェームズ6世がテューダー朝より受け継ぐイングランド王権とはどのようなものなのか，スコットランド側の王の側近達は異国であるイングランド王権の性質を解釈する必要に迫られた。他方，折しもエリザベス治世期から新大陸への進出も始まっており，このこともまた同時に征服の問題を惹起した。フーコーは，イングランドにおける「ノルマンの軛」を再考し，征服と法制度の関係を説明しなおすことによって，ノルマン人がイングランドを支配した権利から，イングランドの植民地での権利が導き出されたと分析する。そして，植民地での権利の基礎付け問題に直面したのはたんにブリテンだけではなく，カール5世が新大陸に対して行ったことによって，他のヨーロッパでも征服と植民の権利問題が引き起こされ，ヨーロッパ諸国が自らの歴史における人種間の征服と法•権利の問題を理論付けることになった，と見ている。「この16世紀末に，まったくはじめてかどうかは分かりませんが，少なくともほぼ初めて，植民地での実践が，西欧の法的・政治的構造にはね返ってくる効果を私たちは目の当たりにするのです。植民地化はまた，西欧の権力メカニズム，権力の装置，制度，技術にはね返ってくる数多くの効果をもったことを忘れてはなりません。西欧に持ち帰られた一連の植民地モデルがあるのです。そして，それによって，西欧は自分自身に対しても，植民地化，内なる植民地主義のようなものを実行することになったのです」[20]。フーコーは，スコットランド女王メアリーのブレーンでもあったアダム・ブラックウッド（Adam Blackwood）の"Apologia pro Regibus"の次のような一節を引くことで，今やブリテン王権へと拡張しつつあるイングランド王権に付与された帝国統治権的性格を描写している。「ノルマン人がイングランドにいるのは，我々がアメリカにいるのと同じ権利，すなわち植民の権利によるのである」[21]。こうして，ステュアート王権は，過去のノルマン人のイングランド侵入に権利を認めることによって，当時のイングランド人のアメリカ進出をも同等の権利に根拠付ける議論を展開したのである。

（4）征服と法制度の解釈をめぐる分流

フーコーは，ブリテン・ラディカリズムが生じた背景には，征服と法制度の解釈をめぐって決定的に対立する二種の解釈があるとする。その一つは「王の言説」すなわちスコットランド王ジェームズ6世側の解釈である。この解釈は，上記のブラックウッドの一説にも明らかなように，ノルマン人の征服の権利を認めることで，ノルマン人によるイングランド所有と法制定の正当性を導き出すものであった。つまり，現行のイングランド王権はノルマン人の長であった王から生じ，したがってノルマン人の長の後継者の資格でジェームズ6世はジェームズ1世としてイングランド王を継承するのだという解釈である。

ところが，17世紀前半，スチュアート王権との対立が激化するにつれ，イングランドの議会派では，別のタイプのイングランド王権の理論付けが登場した。それは，ウィリアムが王になったのは「征服」ゆえではないと主張した。エドワード懺悔王はウィリアムを後継者に指名したのであり，他方，正統な後継者を主張したハロルドは戦死したのであるから，ウィリアムは「正統な後継者」として王位に就いたのであった。それゆえ，ウィリアムはそれ以前からのイングランド王権すなわちサクソンの政体の法によって限定をうけた王権の継承者なのだ，というのが議会派のイングランド王権正当化の立論であった。

議会派の議論の特徴は，ノルマン王ウィリアムはサクソン王制の体系に自ら縛られることを受け入れて王となったのであり，したがってサクソンの古来の国制は彼の征服以降も継続されたのである，というように，サクソン王制以来の継続性を確認する点にある。サクソン人は反乱を起こさず，ノルマン人達を殺さないことによって，ウィリアムの王政を承認したのであり，この意味では，イングランド王権はサクソン以来，変更はなされなかった。しかし，ノルマン人の移住の後にノルマン貴族と王権による一連の権利剥奪と濫用，横領が起こったのは確かであり，「ノルマンの軛」とはそのような一部による権利濫用を意味するのであって，侵略ではないとい

うのがその議論の主旨である。

17世紀前半に生じた二つの王権解釈がいかに激しく対立したかは，その後の王権と議会の抗争に如実に表れている。ポーコックが議会派によるサクソン王権継承の理論化の際に援用されたフィレンツェ的伝統の要素，とりわけその混合政体論に注目し，その要素の共和政以降の根強い継承に注目するのに対し，フーコーは古来の国制論の登場を「サクソンの自由」という歴史の発明と見なす。

古来の国制論が「サクソンの自由」という過去に訴えることで，混合政体とのカップリングにおいてイングランド王権を正当化したのに対し，ステュアート朝帝国的統治理論の特徴は，もはや過去の歴史に訴えることがない正当化の手法を用いた点に思想史的特徴がある。王権が来世や彼岸という現世外の目的への導き手として存在する中世・ルネサンス期の国家観とも袂を分かち，さらには国家の起源や基礎付け，王朝などの正当性といった問題をももはや問うことなく，もっぱら統治術によって絶えず国家を維持すること自体を目的とする国家観に移行した点に，フーコーは近代的国家理性の登場を見るのである。「統治術と国家理性はもはや起源に関する問いをたてることがない」[22)]。こうして統治理性は終着点なき無際限な時間の中で，均衡を保った複数性によって獲得される安定性を追及するものとして登場する。

この統治理性が具体的に表現された先駆的例としてフーコーが挙げているのは，ベーコンである[23)]。ベーコンは，まさにジェームズ1世時代の大法官であり，国王にアイルランド植民を進言した人物でもある。ベーコンは，統治が操作・管理すべき二大要素とは，騒擾や反乱の潜在的原因である人民の「腹」すなわち貧困と彼らの「頭」すなわち臆見であると指摘した。「騒擾seditionsの素材には二種類ある。多くの貧困と多くの不満である。‥‥空腹の反乱は最悪である。不満に関して言うと，政治体における不満は，身体における体液―異常な熱を出して炎症をおこしやすい体液のようなものである。対策についていえば，一般的予防法がいくつかあるかもし

れない。‥‥第一の対策もしくは予防法は，騒擾の材料となる原因をあらゆる手段で取り除くことだ。この目的に役立つのは，貿易の拡大と均衡の確保，製造業の育成，怠惰の追放，奢侈禁止令による浪費と放縦の禁止，土地の改良と開墾，販売品の価格規制，租税および貢納の軽減などである。‥‥苦痛や不満を解消させるために適度の自由を与えることは，安全な方法である。体液を押し戻して傷を内出血させる人は，悪性の潰瘍や有害な膿傷を生じる危険に陥る」[24)]。腹と頭こそ，社会の不満の真の原因なのである。人民の腹は，富，富の流通，税の計算によって管理でき，これらに携わるのが経済学と位置づけられた。また，人民の頭は，臆見（イドラ）の計算と「ノヴム•オルガヌム」（帰納法的推理法）に基づく諸学の刷新キャンペーンによって操作可能であり，これは広告業の役割であるとされた。こうして，ベーコンにおいて経済学は広告業とともに人民統治術の一要素として登場する。

フーコーは，ベーコンが，マキャヴェリにおけるような「君主が権力を奪われる」潜在的危険ではなく，「国家の内部にある，民衆のなかにある潜在的危険」に焦点をあて，それをコントロールしようとする視点を提示している点に，「統治性」の誕生とそれに伴う「経済学の発生の端緒」を見いだす。こうして，ベーコンを経済学の起点におくことで，我々は，マキャベリ主義から新マキャベリ主義への流れでは汲み取れない，ブリテンにおける経済思想の生成のもう一つの流れを描くことができる。そして，この流れの中にある代表的人物として他に挙げるべきは，ホッブズとペティである。ステュアート前期のベーコン，共和政期のホッブズ，王政復古期のペティをステュアート朝開始より始まる「帝国的統治理論」の継承者として位置づけ，ベーコン，ホッブズの影響を受けつつ，ペティがどのように統治理性を具体化しているかを以下に考察してみたい。

２．ペティにおける統治理性

（１）「統治理性」とは何か

ペティは，グラントとの共著とされる『死亡表』において，統治術について次のように語っている。「統治術, そして真の政治学（the true Politicks）は, 臣民をいかに平和（Peace）で豊かな（Plenty）状態にしておくかということである。にもかかわらず，人々は，統治術のたんなる一部，つまりいかにして互いに他のものに取って代わるか，出し抜くかを教える部分，また，公正により速く走ることによってではなく，いかにして互いの足をすくうことで賞を獲得するかを教える部分だけを研究しているにすぎない」[25]。ペティは，自身が提唱する「正直で無害な政策（Policy）の基礎もしくは基本要素」として次のようなことを挙げる。まずは，統治の対象である土地と人手についてその量と属性を正確に知ることである。ペティは，土地についてはまず面積，形状，位置，単位あたりの生産量を測定することが肝要とされる。「例えば，一王国のすべての土地の幾何学的面積，形状，位置を，とりわけ最も自然で恒久的で目につきやすい境界にしたがって知るもよし。また，各種の牧草地の１エーカーはどれだけの干し草を生み出すか，同じ重さの各種の干し草は何頭の家畜を養い肥育するであろうか，同じエーカーの土地が1，3，7年後にどれだけの量の穀物またはその他の商品を生み出すか，つまり年平均を知るもよし。それぞれの土壌はどのような用途に最も適しているかを知るもよし」[26]。ペティはこのような要素を「内在的（＝本来備わっている）価値（intrinsick value）」と名づける。『死亡表』（1662年）は真の著作権者をめぐってグラントとペティ両人の間に争いがある著作だが，『死亡表』と同年に出たペティの『租税貢納論』（初版1662）に同主旨の記述があることから，この正直で無害な政策のためになすべき測量の提案が，グラントだけではなくペティの見解をも反映していると考えられる[27]。ペティに従えば，土地の内在的価値は，相互の土地の比較の結果，比において表されるべきとされる。なぜなら，この内

在的価値は必ずしも貨幣の量つまり価格に，直接的に反映されないからである。ペティは貨幣で表現された価値の変動要因として，貨幣の量，人間の数と生活水準，彼らの社会的・自然的・宗教的見解を挙げる。「従来のように，この牧草を貨幣と比較するのではない。貨幣の場合，牧草の価値は貨幣の豊富さにしたがって多くも少なくもなる。‥‥また，右の牧草の価値は，この土地の近くにすむ人々の数の多さ，そしてかれらの生活か贅沢か倹しいかによっても変化する。さらには，それら人々の社会的・自然的・宗教的見解によっても変化する」[28)]。この変動要因の結果，決定されてくる価値を彼は「外在的または偶然的価値」と名づける。

それゆえ，この外在的・偶然的価値の調査以上に重要になるのが，変動要因の実態をできるだけ詳細に調査することである。「性別，身分，年齢，宗教，職業，階層，等級別に人口を知ることは，交易と統治がより確実で規則正しくなるであろうための知識に決して劣らないほど必要なのである。というのは，もし仮に上述のように人々を知っているとすれば，彼らがするであろう消費を知ることができるかもしれないし，従って，交易がそれが不可能なところで期待されることもないもしれない。例えば，アイルランドの南西と北西の一部には，交易に適した多くの良港があるのに，そこに交易は定着しない，という非常に多くの不満を私は聞いたことがあるのだが，そのような場所の幾つかでは，次のようなこともまた聞いた。つまり，住民の大多数は天然の産物による生活者（ex sponte creatis）であり，他人を雇用するにせよ，自分で働くにせよ，交易には適さぬ人々なのだ，というのである」[29)]。まさに，前節で言及したベーコンによる民衆の「腹」の管理の方針がここで具体化されているのがわかるだろう。「腹」の管理のためのその実態の把握の仕方をここでペティは述べているのである。さらに，民衆の「頭」の管理のための実態把握の重要性についてもペティは次のように述べている。「さらにはもし（私はただ推測しただけの）これらの事柄が明瞭に真に知られたならば，次のことが確かになるだろう。必要な労働や職業に従事している人々がいかに僅かか，つまり，いかに多

くの女性と子供が他者が得たものを消費することしか知らず，何もせずにいるか，いかに多数のものが放蕩者であり，あたかも交易を使った賭博師のようであるか，いかに多くの者が神学や哲学上の不可解な観念によって哀れな民衆を当惑させることによって暮らしているか，いかに多数のものが，信じやすく鋭敏で論争好きの人々を，彼らの体や財産の調子が悪く危険であると思い込ませることによって暮らしているか，いかに多数のものが兵士として戦うことによって暮らしているか，いかに多くが悪徳と悪事の手先になって暮らしているか，いかに多くがたんなる快楽や装飾品を売買することによって暮らしているか，いかに多くが他人にだらだら付き添うことによって暮らしているか，そして他方では，いかに少数が必要な衣食住の生産や製作で雇用されているか，そして，思索力のある人間のいかに少数が自然と事物の研究を行っているか，ということである。思索力ある人間のなかで比較的才ある者も，自然と事物については機知にとんだ仕方で書いたり語ったりするより先には行かないのだ」[30]。以上で提唱されているのは，人々の「憶見」の実態の把握とその量の測量である。まさにベーコンのいう「憶見の計算」の具体化がなされているといっていいだろう。こうして，ペティは「善良で確実で容易な統治」のために必要な知識の提案を行った。さらにペティは統治の目標として国家と教会の双方において，諸党派や諸派閥の釣り合いをとる必要も挙げる。この点もまた，前節で述べた「均衡を保った複数性によって獲得される安定性」を目指す統治理性の特徴を反映しているといえるだろう。

では，このような統治理性を実際に誰がもちうるのか。国王についてペティは，統治と交易のみならず，自然の知をも探求するものとして評価している。「国王は，古来の権利によって最高者として統治と交易という事柄に関わるだけでなく，幸運にも哲学者達や物理学者／数学者の王でもあります。このように言うのは，おべっかやお世辞ではありません。国王の個人的才能やそれら学問への愛着ゆえに，本当にそうなのです。こういうわけですので，（政治と自然という）両種類の私の考察を，最も神聖なる国王

に謹んでささげようと思っていました」[31]。しかし，他については彼は問いつつも解答を控えるのである。「しかし，そのような知識が多くの者に必要か，つまり君主やその大臣達以外の者に適合するかどうかについては，ここでは考察を控える」[32]。

以上のペティの統治理性に明らかなように，17世紀に，統治に必要な知を特徴づけるものとして，法についての知とはまったく異なるものが出てきたのである。新しい決定的なことは，「主権者は国家を構成する諸要素」すなわち「国家維持（国力の護持，国力の必要な発展）を可能にする要素」についての知をもたねばならなくなったということであり，この知は，ペティが名づけたところによれば，「政治的解剖」「政治算術」，またフーコーによれば，ドイツでは当時「統計学statistik」すなわち国家の認識と呼ばれていた。フーコーはこの知を以下のように特徴付けている。「ある時点において，国家を特徴づける力や資源に関する認識です。たとえば，人口に関する認識，人口数の計量，死亡率や出生率の計量，国内の様々な範疇の諸個人の算定，彼らの富の算定，国家が使える潜在的な富（鉱山や森林など）の算定，生産されている富の算定，流通している富の算定，通商のバランスの算定，税の効果の計量，その他すべての所与が今や，主権者の知の本質的内容を構成することになる。もはや法の集成やしかるべきときに法を適用する巧みさではなく，国家自体の現実を特徴づける技術的な認識の総体が主権者の知となるのです。もちろん国家に関するこの認識は技術的に多くの困難を提起しました。知ってのとおり，統計学がまず発展したのは，まさに，国家が比較的小さい所，あるいはまた有利な状況があったところでした。たとえばイングランドに占領されていたアイルランドがそうです」[33]。

重要なのは，ペティの知のあり方において「政治的なのもの」と「自然的なもの」が結びつけられているという点である。「私が偶々（私は計画していたわけではないので）行うことになった死亡表に関する考察は，結果として政治的で自然的なものになりました。つまり，一方では交易と政治

に関するものであり，他方では，大気，田舎，季節，実りの多さ，健康，病気，寿命，人間の性別と年齢別の割合に関わっています」[34)]。政治的なものが自然的なものとの結合によってその質を変化させたところに統治理性があり，経済学はその統治理性を構成する必須の知として登場したのである。

（2）ペティの「政治的解剖」へのベーコン，ホッブズの影響

では，ペティの統治理性にベーコンとホッブズがどのような影響を与えているのだろうか。『アイルランドの政治的解剖』でのペティの次のような序言は研究者に大きな謎を与えてきた。「サー・フランシス・ベーコンは，彼の『学問の進歩』のなかで，自然体（body natural）と政治体（body politick）との間に，また両者が健康と力を保持する諸方法の間に，いくつかの点について賢明な類比を行った。そして，解剖が一方のものの最善の基礎であるのと同じく，他方のものについてもまたそうであるということ。また，政治体の均整，構成組織（fabric），割合を知ることなしに政治を処理するのは，老婆や藪医者の治療のように行き当たりばったりのものである。さて，解剖とは，ただ医者にのみ必要であるばかりでなく，どんな哲学的人物からも高く評価されるものだ。それゆえ，私は政治を職業としてはいないが，私の好奇心ゆえ，政治的解剖についての最初の試論を成り行きにまかせて書いてみたのである」[35)]。しかし，実際のところ，ベーコンは『学問の進歩』においては，医者と比較解剖学には触れている程度であり，何か具体的な提案があるわけではない。ただ，国家や身体自身の存立構造を知らなければ，それらを維持管理する技術の是非も知りえないと指摘している点は重要である。「医師，そしてたぶん政治家も，その能力を立証する特別の働きをもたず，たいてい，成り行きによって判断されており，その成り行きはなんとでも解されるからである。それというのも，患者が死んだり回復したりする場合，あるいは国家が存続したり滅亡する場合，それが技術なのか偶発事なのかは，誰にもわからないからである。それゆ

え，しばしば，いかさま医師が尊重され，熟達の医師が非難されるのである。いや，われわれの知る通り，人間はじつに弱くてだまされやすいものなので，しばしば，学問のある医師より，香具師や魔女のほうがうけるのである。‥‥いつの時代にも，世間一般の考えでは，魔女と老女と香具師たちは，医師と競争していたからである」[36)]。そして，存立構造を知るための重要な観点を，ベーコンは現行の解剖学の不十分さを指摘することによって，次のように述べている。「解剖学によってなされる研究には，多くの欠陥が認められる。というのは，医師たちは人体の諸部分とそれらの実体と形態と配置（substances, figures, and collocations）は研究するが，孔管の秘密とか，体液の中枢つまり溜まり場とかは研究せず，病気の痕跡と影響もあまり研究しないからである。‥‥諸部分の個人差についていえば，臓器の形態あるいは機構（the facture or framing）もきっと外部におとらず多種多様であるに違いない。そしてそこに多くの病気のもとである原因があるのに，それが観察されていないので，医師たちはしばしば，なにも欠点のない体液になんくせをつけるのである。しかし，欠点は，他ならぬその部分の構造と機構（frame and mechanic of the part）なのであって，それは体質転換薬によってなくすことはできず，食事と常備薬で緩和されなければならないのである」[37)]。この「部分の構造と機構」の把握とそこにおける欠点の発見の重要性の指摘は，ペティが「政治算術」を提唱した際の書簡にそのまま反映されている。「閣下よ，世にはなお一層奨励せらるべき政治算術と幾何学的正義（Geometrical Justice）というものがあるからです。世の誤謬や欠陥は，たとえ機智・修辞または利害関係でとりつくろうことはできても，それによって誤謬・欠陥そのものを救治することはけっしてできません。…このことは，悪質のぶどう酒にブランディや蜂蜜をまぜたところでどうにもならず，また，できそこないの料理にこしょうや砂糖を法外の割合でいれたところでどうにもならぬのと同じで，物事は悪く処理されることを欲しないからであります」[38)]。ここでペティが「政治算術」と「幾何学的正義」の下に意味しているのは，自然体と同様に政治体

がもつ「部分の構造と機構」の把握，並びにそれら構造と機構の適合性である。また，民衆の「腹」と「頭」の管理において，政治的なものと自然的なものを結びつけるという意味でも，ペティは確かにベーコンを踏まえている。相互に規定しあう要因として政治的なものと自然的なものの測量が目指されていたのであり，しかもその数量的把握はさらに「部分の構造と機構」の把握を目指してのものだったのである。したがって，ペティの「政治算術」は，たんに統計知に留まるものではない。政治体の部分の構造と機構を見究めることが彼の「解剖」の謂いであるとすれば，政治算術は政治体の諸「部分」を把握する方法なのである。

ただ，ペティに先駆け，実際に自然体と政治体を類比してみせたのはベーコンだけではなかった。より明示的にそれを成し遂げたのはホッブズであった。『リヴァイアサン』第Ⅱ部第22章「政治的および私的な臣民の諸システム」においては，コモンウェルスの諸システムと自然の肉体の筋肉が，単一の利害や仕事において結合する筋肉と人々という形で類比されている。次に第23章「主権的権力の公的代行者（public ministers）」においては，主権者によって何かの事柄のために雇われ，その業務において権威をもってそのコモンウェルスの人格を代表する主権的権力の公的代行者が自然の肉体の器官的部分に類比されている。一般行政（administration）は神経と腱であり，経済に関する特殊行政（貢納，賦課，地租，科料，財務／軍事）は血管（静脈と動脈）に喩えられる。さらに，人民の指導にあたって，司法は身体の発声諸機関であり，執行人は手に当たるとされる。また，第24章「コモンウェルスの栄養摂取と子孫産出」では，国家の栄養摂取は素材（動物，植物，鉱物）の豊富さと分配にあるとされ，法は分配を司り，貨幣は血液と同じ栄養の循環であり，植民（plantations, or colonies）は子孫産出に類比される。

このように政治体を自然体に類比することでどんな効果が生じるかといえば，政治が君主や個々人の権利と意思の集積としてではなく，統治システムとして，つまり，諸部分の連結により構成される安定性ある体系とし

て理解されるようになるのである。そして，ホッブズの叙述の中にも，ベーコン的な民衆の「腹」と「頭」の管理は見出せる。『リヴァイアサン』第30章において，ホッブズは民衆の従順さのコントロールと経済的繁栄の関係について次のように指摘している。「人民は，第一に，かれらの隣接諸国民においてかれらがみる統治形態を，かれら自身のそれよりも愛好したり，（かれらとちがったやりかたで統治されている諸国民において，いかなる眼前の繁栄をみようとも），変更を意欲したりしてはならないことをおしえられるべきである。なぜなら，貴族的または民主的な合議体によって統治されている人民の繁栄は，貴族政治や民主政治からくるのではなくて，臣民たちの従順や和合からくるのだからであり，その人民が民主政治においてさかえるのは，ひとりの人がかれらをおさめる権利を有するからではなく，かれらがかれに従順であるためだからである」[39]。臣民の経済的繁栄は政治体のあり方よりも，いかにその政治体において人々が従順かつ和合しているかによる，それゆえ，主権者権力について論争しないことが重要であるとホッブズは述べる。「主権的代表をわるくいうとか，彼の権力について議論し論争するとか，かれらの名称をなにか不敬に使用するとか」によってコモンウェルスの支えである人民の従順がゆるむ[40]。それゆえ，人民の「頭」の管理のためには，法と政治の教育が重要であり，大学の重要性もそのような機能にあるとされる。さらには，法も同様に，民衆の傾向性をコントロールするものとして位置づけられる。「《必要なもの》すなわち法（それは権威づけられた規則にほかならない）の効用は，人民を，すべての意志的行為をしないように拘束することではなくて，かれらを，自分たちの無茶な欲求や性急さや無分別によって自ら傷つけないような運動の範囲に，みちびき保持することにある」[41]。

また，ホッブズは，国家が統治の仕事としてなすべき民衆の「腹」の管理についても次のように語っている。労働不能な人は「私的諸人格の慈恵にまかされるべきではない，自然の諸必要が要求するかぎり，コモンウェルスの諸法によって」公共的慈恵が支給されるべきであること，また，強

い身体をもつ人は怠惰の予防し，はたらくように強制されるべきであること，そのためには「航海，農業，漁業および労働を必要とするすべての手工業のような，あらゆるやりかたの技術を奨励しうる諸法」が必要であることが指摘される[42)]。さらに貧民対策としての植民も統治の仕事として提案される。「まずしくてしかも強い人民の数は，なお増加しつつあるから，かれらは十分に住民がいない諸国へと移植されるべきである。だが，そこにおいてかれらは，かれらがそこであう人々を絶滅すべきではなく，後者に対して，まえより密接して住むように，また見つけたものを獲得するために広大な土地を徘徊しないで，それぞれの小地片が適当な季節にかれらの生活資材を与えることを技術と労働によってもとめるように，強制すべきである」[43)]。

実際のペティの著作にはホッブズの影響が色濃く反映されている。問題は，なぜペティがホッブズの名前を敢えて挙げなかったのかということだが，これは共和政と王政復古という政治状況におけるホッブズの微妙な位置，とくに王政復古後のチャールズ2世との軋轢をペティが知っていて警戒したからではないかという推測がたつ。ペティ自身，クロムウェル支配下のダウン・サーヴェイの功績で土地を獲得した経歴ゆえに，以降代々の君主から信頼を得ようと非常に気を使っていた。それは，T・マコーミックがよく分析している[44)]。ペティがホッブズをどのように評価していたかについては，F.アマティとT.アスプロマーゴスが英訳したペティ自身のラテン語手稿に如実に示されている[45)]。訳者によって「ペティ対ホッブズ」と題された手稿は，両者の差異よりもむしろ，ホッブズの分析の不足を批判するペティの観点それ自身が統治理性の到達点を伝えてくれる点で注目すべきものである。そして，それはある意味，ペティによるベーコン的問いの徹底した遂行とも見なされる。ペティの批判は，ホッブズによる王政と民主政の比較と，結果的に導き出された王政優位の結論は不適切であるというものだ。ホッブズは，富裕さ，国家的暴力の制御，自由度（法，禁止，障害物の少なさ），国家の諸機関での理性ある発言や審議，国家が抱え

る難題を議論する際の適切さと慎重さ，軍の統帥者の選出のされ方，などの観点から比較し，王政に軍配を上げた。これに対してペティは，ホッブズの比較が不十分であるとし，以下のような観点を付け加える。すなわち，政体の安定性，市民の富裕さ，軍事力の維持，治安，技術の発達，新発見の頻度，人口の増加，人間の本性にとっての快適さ，国政における分業のあり方，代表選出のあり方，などである。この列挙された観点はまさに統治の具体的な目標を示している。また，政治制度を考察するペティの思考が，権利の語彙のまったく外部にある点も特徴的である。一人の人間に権力を永久に預けることや，短期間毎に更新する形である部署に同じ人物を任命し続けることの是非が，人間本性との適合性から判断されるのである。主権の問題も，王一人では，物事の日々の変化や気分の影響を受けやすいので権力は民衆自身によって形作られ計画されたほうがよいというように，数がもたらす安定性によって判断される。また，人間個々人は自分自身を支配・指導する能力を果たしてもつのかについても，ペティは敢えて問う。そのうえで，市民による新しい政体の編成を提案するのだが，その内容は統治の目標達成を目指す執行集団の編成である。

３．まとめ：「統治理性」からのペティ研究の拡張

彼の統計知は，当時地図もなかったアイルランドの土地と人口把握のためのものであり，オランダなどの分析から流通における循環の速度と維持しうる人口密度の連関を探るその経済的知はアイルランドの改善（improvement）のための計画立案のためのものであった。そして，彼の統治論は，「共和政以降新しく生まれた国家」（ペティはアイルランドをこう認識していた）の政府の役割と組織のあり方を模索するものであった。ペティはその畜牛法批判にも見られるように，現行のアイルランドの政府と政治制度，そしてイングランドのアイルランド統治体制を十分なものとは見ていなかったのである。ペティの「悪名高い」イングランドとアイルラ

ンド間の住民互換計画も，帝国の統治理性の彼なりの表現であるとも言えるだろう。

ペティを新しいタイプの統治の知，すなわち「統治理性」の先駆者として位置づけることは，アイルランド思想史にとっても大いに意義がある。1798年のユナイテッド・アイリッシュメンの反乱で幕を閉じる18世紀アイルランド思想史では，従来，北アイルランドのプレスビテリアンの市民的人文主義の潮流や，初期ユナイテッド・アイリッシュメンの創立メンバーであるウルフ＝トーンに見られるような，ダブリンのアングロ・アイリッシュ（ステュアート前期と共和政期にイングランドから移住してきた家系）の市民法学的潮流が注目されてきた。この二潮流ともに，混合政体とサクソンの自由を原理とするイングランド国制が移植された地としてアイルランドを捉え，イングランド国制に準拠して現行体制の批判を行った。これを「法権利の理論（イングランド国制移植論）」としてカテゴリー化し，その下にW.モリヌーやウルフ＝トーンなどを入れることはできるが，問題はその中に入れるには思想的にどうも異質の要素をもった人物たちが存在することである。例を挙げれば，ペティ，G.バークリと1720年代の経済時評家達，そして後期のユナイテッド・アイリッシュメンのリーダー，A・オコナーであるが，彼らの論考はたんに法と権利の語彙で構成されてはいない。この潮流はペティに始まるアングロ・アイリッシュの「統治理性」の流れとして括ることが可能であると思われる。この「統治理性」は植民という事業のうえに存在するアングロ・アイリッシュであればこそ，形成されたものであったといえるだろう。

1）　大倉正雄「初期啓蒙とペティの経済科学」田中秀夫編『啓蒙のエピステーメと経済学の生誕』，京都大学学術出版会，2008年。大倉正雄『イギリス財政思想史：重商主義期の戦争・国家・経済』2000年，日本経済評論社。伊藤誠一郎「政治算術の継承に関する一考察―ベイコン，ペティ，ダヴナント―」『三田学会雑誌』90巻1号，1997年。

2) Adam Fox, “Sir William Petty, Ireland, and the making of a political economist, 1653-87”, *Economic History Review*, vol.62, no.2 (2009), pp.388-404. Ted McCormick, “Transmutation, Inclusion, and Exclusion: Political Arithmetic from Charles II to William III”, *Journal of Historical Sociology*, vol.20, no.3 (2007), pp.259-278. Frances Harris, “Ireland as a Laboratory: the Archive of Sir William Petty”, in M.Hunter(ed.), *Archives of the scientific revolution: the formation and exchange of ideas in seventeenth-century Europe*, Woodbridge, 1998, pp.73-90. T.C.Barnard, “Sir William Petty, Irish Landowner”, H. Lloyd-Jones, V.Pearl, B.Worden (eds.), History & Imagination, Gerald Duckworth & Co. Ltd. 1981, pp.201-217. T.C.Barnard, “Sir William Petty, his Irish Estates and Irish Population” , *Irish Economic and Social History*, 6, 1979, pp.64-9. .C.Barnard, “Sir William Petty as Kerry ironmaster’, Proceedings of the Royal Irish Academy, 82-C-1, 1982, pp.1-31. T.C.Barnard, “Fishing in seventeenth-century Kerry: the experience of Sir William Petty”, *Journal of the Kerry Archaeological and Historical Society*, 14, 1981, pp.14-25. T. Aspromourgos, “New light on the economics of William Petty (1623-1687): some findings from previously undisclosed manuscripts”, *Contributions to Political Economy*, 19, 2000, pp.53-70.

3) Istvan Hont, *Jealousy of Trade: International Competition and the Nation-State in Historical Perspective*, Belknap Press, 2005 (田中秀夫監訳『貿易の嫉妬』昭和堂，2009年)

4) Steve Pincus, “Neither Machiavellian Moment nor Possessive Individualism: Commercial Society and the Defenders of the English Commonwealth”, *American Historical Review*, 103(1998), pp.705-736.

5) Michel Foucault, *Securite, territoire, population* : *Cours au College de France 1977-1978*, Gallimard, 2004, p. 248.（高桑和巳訳『安全・領土・人口：ミシェル・フーコー講義集成７』筑摩書房，2007年，300頁）

6) Ibid., p.248.（邦訳書，300頁）

7) J.G.A.Pocock, The *Machiavellian Moment*, Princeton U.P., 1975, p.335.（田中秀夫，奥田敬，森岡邦泰訳『マキャベリアン・モーメント：フィレンツェの政治思想と大西洋圏の共和主義の伝統』名古屋大学出版局, 2008年, 282頁）

8) Ibid., p. 386（邦訳書，329頁）

9) Ibid., p.423（邦訳書，362頁）

10）Ibid., p.461（邦訳書，397頁）
11）Ibid., p.460（邦訳書，396頁）
12）Ibid., p.460（邦訳書，396頁）
13）Michel Foucault, *Naissance de la biopolitique, Cours au College de France 1978-1979*, Gallimard, 2004, p.42.（慎改康之訳『生政治の誕生：ミシェル・フーコー講義集成8』筑摩書房，2008年，50頁）
14）Ibid., p.276.（邦訳書336頁）
15）Ibid., p.283.（邦訳書，344頁）
16）Ibid.,p.282.（邦訳書，343頁）
17）Ibid.,p.286.（邦訳書，347頁）
18）Inid., p.11f..（邦訳書，14頁）
19）Ibid., p.290.（邦訳書，352頁）
20）Michel Foucault, *Il faut defendre la societe*:*Cours au College de France 1975-1976*, Gallimard,1997, p.89.（石田英敬・小野正嗣訳『社会は防衛しなければならない：ミシェル・フーコー講義集成６』筑摩書房，2007年，103頁）
21）Ibid., p.89.（邦訳書，103頁）
22）Foucault, *Securite, territoire, population*, p.265.（邦訳書，322頁）
23）Ibid, p. 273（邦訳書，336頁）
24）Francis Bacon, *The Essays*, ed. by John Pitcher, Penuin Classics,1985, p.103f..（渡辺義雄訳『ベーコン随想集』岩波文庫，1983年，74-75頁）
25）“Natural and political Observations,mentioned in a following index, and made upon the bills of mortality”, 1766, in C. Hull (ed.) , *The Economic Writings of Sir William Petty*, p.395.
26）Ibid.,p.395
27）“The treatise of taxes”, *The Economic Writings of Sir William Petty*, p.50（大内兵衛・松川七郎訳『租税貢納論』岩波文庫，1952年，87-89頁）なお，「平和Peaceで豊かなPlenty状態」という言葉は，ペティの『アイルランドの政治的解剖』にも登場する（*The Economic Writings of Sir William Petty*, p. 130）。
28）Ibid., p.50.（邦訳書，89頁）
29）Petty, “Natural and political Observations”, *The Economic Writings of Sir William Petty*, p.396.
30）Ibid., p.396f..
31）Inid., p.323.
32）Ibid., p. 397.

33）Foucault, *Securite, territoire, population*, p.280（邦訳書，338頁）
34）Petty, “Natural and political Observations”, *The Economic Writings of Sir William Petty*, p.322.
35）*The Economic Writings of Sir William Petty*, p.129-130（邦訳書，21-22頁）
36）フランシス・ベーコン『学問の進歩』服部英次郎，多田英次訳，岩波文庫，1974年，191-2頁。
37）同上書，196頁。
38）“Political Arithmetic”, *The Economic Writings of Sir William Petty*, p.239f..（大内兵衛・松川七郎訳『政治算術』岩波文庫，1955年，16頁）
39）トマス・ホッブズ『リヴァイアサン（二）』水田洋訳，岩波文庫，1992年，264頁
40）同上書，265頁。
41）同上書，275頁。
42）同上書，273頁。
43）同上書，274頁。
44）Ted McCormick, ‘Transmutation, Inclusion, and Exclusion: Political Arithmetic from Charles II to William III’, *Journal of Historical Sociology*, vol.20, no.3 (September 2007)
45）Frank Amati & Tony Aspromourgos, “Petty Contra Hobbes: A Previously Untranslated Manuscript”, *Journal of the History of Ideas*, vol.46, no.1 (1985) , pp.128-132.

Settlements in Ireland and governmental reason: William Petty and the birth of political economy.

Hiroko GOTO

《Abstract》

In the research field of Irish history, William Petty (1623-87) has been seen as an English absentee who was granted land in Ireland during the Cromwellian era as a result of the Down Survey he carried out. Also, in the history of economic thought, he has been recognized as a founder of political arithmetic. Only scant attention has been paid to the relationship between his writings and his background. Recent research on Petty, however, has not only created an awareness of the importance of his concern to have Ireland improve and progress but has also given considerable attention to the context of his writings. In broad terms, his writings can be understood as a politico-economic theory of settlements for the purpose of the governance of the British Empire.

This paper principally aims to analyze the formation of governmental reason (*raison gouvernementale*) in Petty's writings. To begin with, we define Michel Foucault's concept of governmentality (*gouvernementalité*) and his view on the formation of politico-economic thought in Great Britain, and compare this with the opinions of J. G. A. Pocock. Then, we analyze the influence of Francis Bacon and Thomas Hobbes on Petty, and, finally, we describe him as a founder of the Irish tradition of governmental reason.